ルポライター
滝川 康治

農と食、北の大地から

連載第 139 回

耕作放棄地の再生に向けて

――札幌・小別沢地区の「自給の森」講座の試みから――

高まる都市住民の〝農〟への関心 地域と連携し模索する自給の道

地域住民とNPO法人、都市部の住民が協力し、札幌市内の耕作放棄地を開墾しながら〝農的な暮らし〟を実現していく「自給の森」講座が、昨年秋から西区の小別沢地区で始まっている。30代の女性を中心にした20人余りの受講者は、開墾作業のかたわら土壌の観察や堆肥の基礎知識などを学び、畜産物の加工を体験したり、町内会の役員が語る地域の歴史に耳を傾けた。利用可能な耕作放棄地は約1万坪（3ヘクタール余り）。「農」をめぐる体験教室や畜産加工、野菜や穀物・果樹などの栽培、親子の教育体験…など「自給の森」の活用に向け夢は膨らむ。始まったばかりの講座を取材し、この企画を担う人たちの声とともに紹介する。

耕作放棄地の開墾から出発 〝農的な暮らし〟志す人たち

札幌市の中心部から直線距離で7キロほど、大倉山に近い西区の小別沢地区は、１９０万都市の奥座敷のようなところだ。山あいに30世帯ほどが暮らす農業地帯だが、後継者不足や高齢化などで離農が進む。

昨年秋、小別沢の耕作放棄地を開墾しながら、農業や畜産物の加工品づくりなどを学ぶ講座「自給の森」が始まった。10年間にわたり〝農的な暮らし〟をテーマにした講座を続けてきた地元のＮＰＯ法人「あおいとり」（永田勝之代表理事）と小別沢町内会（伊部義幸会長）が連携した、地域の再生をめざす試みである。

もう40年近くも作物を栽培していない土地の一部を提供してもらい、まずは2アール（約60坪）の草を刈り取り、土の状態などを観察。今春からは、そこで菜園や庭づくりをする一方、畜産物の加工なども試みる。

「自給の森」講座の企画を担うために「小別沢教育ガーデン事務局」を立ち上げた。スタッフは10人。14年度の受講者は20人余りで、子育て中の女性の姿が目立つ。

２月７日、「畑をつくる」「地域の歴史」をテーマにした、７回目の講座を取材してみた。

「将来は自給的な生活をしたい。そのための技術を身につけたくて受講しました」

「わたしは自給的なことに憧れがある。ソーラーパネルの仕事をしているので、『自給の森』と自分の仕事をつなげて関われるんじゃないか」

と、自給的な暮らしに対する関心

▲耕作放棄地のうち約２アールの開墾からスタート。枝や落ち葉を取り出す（提供／小別沢教育ガーデン事務局）

◀会場の小別沢会館では座学中心のプログラムを実施している

開墾した土地に穴を掘り、土の状態を観察したり、土壌分析用のサンプルを採取した「自給の森」講座の受講者。
真剣に講師の説明に耳を傾ける（昨年 11 月 15 日撮影）

が動機で参加した人が多い。

チラシを見て札幌市東区から参加した女性は、「土のことをシリーズで学べて良かった。牛や豚のことも知ることが出来ました」と振り返る。アトピー性皮膚炎の子どものために、長沼町などの農家を訪ねて安全な食べものを探してきた女性は、ここで講座が始まると聞いてやってきた。道南の蘭越町から参加した、新規就農に向けて研修中の女性もいる。

小面積の開墾から始めたが、「自給の森」に供される耕作放棄地は3ヘクタール余り（約1万坪）の広さがある。夢は膨らむ。

「ゆくゆくは（この地で）起業して体験教室をやり、自給を広げていきたい。そうしたなかから新たな雇用が生まれて活気づくといい」

と、男性の受講者が声を弾ませる。

原発事故の影響から逃れるために、福島県から札幌へ避難してきた女性には、5歳の娘がいる。

「いろんな出会いがあって、ここととつながることが出来た。（今後は）山の中での子育てや、子どもたちを集めて物づくりをしたい。わたしは絵を描いているので、森のアトリエもいい。本気で考えています」

と力を込め、期待を寄せる。

「どんな楽しいことを皆さんとやれるのか、ワクワクします」

と話すのは、小別沢で野菜農家をやっている、30代の谷口めぐみさん。

「将来は『自給の森』で動物を飼いたい。一人では難しいけれど、一緒にやっていける仲間ができるシステムがあるといいですね」と続けた。

耕作放棄地を提供している地権者の川股弘昇さんは、「小別沢の将来を考えたのが、この集まりのきっかけ。どんどん可能性が生まれてきて、面白い展開になりそうだ」と話し、こんなエールを送った。

「（さまざまな試みが）小別沢の自然環境を守っていく方向に展開できれば、住民としてもうれしい。今が再生のチャンス。地域にうまく溶け込み、小別沢を良くしてほしい」

市の助成事業も活用して NPOと地域住民が連携

講座を切り盛りする「小別沢教育ガーデン」事務局長の永田勝之さん（1952年、浦河町生まれ）は、今から30年ほど前に小別沢に移り住んだ。購入した土地は、戦後開拓がうまくいかなかった山林原野2・5ヘ

自分たちで開墾した土地の広がりを体感（提供／小別沢教育ガーデン事務局）

クタール（約8千坪）ほど。廃屋を借り、建築設計事務所を設立して生計を立ててきた。

東京の大学で建築を学んだ永田さんは、北海道にUターンするまでの間、茨城県内にある「たまごの会」の農場の活動に加わった。

「安全な食べ物を自分たちの手で作ろう」という社会運動の一環として1970年代に誕生した同会は、有志が住み込みで農場の管理運営にあたり、卵や牛乳、季節の野菜などを首都圏の会員に配送した。日本の産直運動の草分けでもある。東京の設計事務所に勤めていた永田さんは、農場の建築スタッフとして奔走し、家畜の飼育係もやりながら、〝農的な暮らし〟の実践を重ねた。

そのころの経験が小別沢でも生きる。自給用の野菜を作り、家族で羊や豚を飼った。町が近いので人の出入りも多く、にぎやかなことをやるのは好きなほうだ。そこで2003年、NPO法人「あおいとり」を設立し、「農的くらしのレッスン」と銘打った講座を10年やった。

作物の播種から栽培、収穫、加工までを体験する企画に一区切りつけ、次に何をやっていくか――。ちょうど札幌市の市民まちづくり局が「NPOによる地域ネットワーク事業」の助成先を募集していた。

「小別沢の住民のうち7戸は農家ですが、後継者のいない人が多い。都市化を期待した時代もあったけれど、今は宙ぶらりんな状態。高齢化が進み、土地を切り売りする状況も見られる。都市部の若い人たちを新規就農させる手法だけでなく、新しい農業のやり方を見いだす必要がある。半農半X（注＝農業のかたわら別の生業を持つ生活スタイル）的な生き方もあるんじゃないか」

こう考えてきた永田さんは、市の事業も活用し、仲間たちと新しい講座に取り組むことにした。

「単なる家庭菜園のノウハウではなく、もう一歩踏み込んで自然の恵みをいろいろと生活に取り入れたい。自然や農の専門家の話にふれ、毎日の暮らしをとらえ直してみたい。実用だけでなく、土の上にいる楽しさ・豊かさをだいじにしたい。街の中では無理でも近くに使える土地があって、少し手伝ってくれる人がいれば入っていける…。そんな想いを抱く方々のために、小別沢の住民とNPOが協力しこの講座を準備しました」

講座の申し込み書には、こんなメッセージが記されている。フェイスブックなどで受講者を募ると、20人の定員に対し49人もの応募があった。自給や「農的な暮らし」に対する関心の高さを物語っている。

講座を企画・運営するNPO法人「あおいとり」代表の永田勝之さん

土壌や堆肥について学び畜産物の加工体験も試みる

14年度は8回の講座を開催した。

晩秋の11月初め、提供された耕作放棄地の草を刈って山積みし、枝や落ち葉を搬出。わずか60坪ほどの開墾着手だったが、参加者には新鮮な体験になったようだ。

わたしは、2回目の講座（11月15日）に初めて取材に訪れている。会場の小別沢会館から雪道を歩いて10分ほどのところに「自給の森」予定地

があ る。受講者が開墾した土地に穴を3つ掘り、土の断面や色、表面の腐植の状態などを観察し、サンプルを採取。それを会館に持ち帰り、土のpH(ペーハー＝水素イオン指数)を測定し、酸性・アルカリ性のどちらに傾いているか調べた。

開墾後、バッコヤナギとエンジュが1本ずつ残った。伐採するかどうか議論した結果、いろんな可能性を探るためにもヤナギだけを伐ることが決まる。丁寧に話し合いを進める姿から、受講した人たちの思いが伝わってきた。第3回の講座では、そのヤナギを鋸で伐り、木が倒れるときの実感も体験している。

第4～6回は「家畜編」。獣医師や酪農家の女性らが講師役になり、現代の畜産事情を学びながら、豚の枝肉を解体してベーコンやハムに加工したり、モッツァレラチーズづくりなどに取り組んだ。参加者の一人が「自給の森」のフェイスブックにこんな感想を書き込んでいる。

「……作業と同時進行で、ゼンキュウファームの久保さんの暮らしや、畜産を取り巻く現状について座学。目から鱗だったのは『家畜を飼うということは、場所さえあれば、ペットを飼うことよりも簡単。だって次(売るとか、食べるとか)があるから』という久保さんのひとこと。

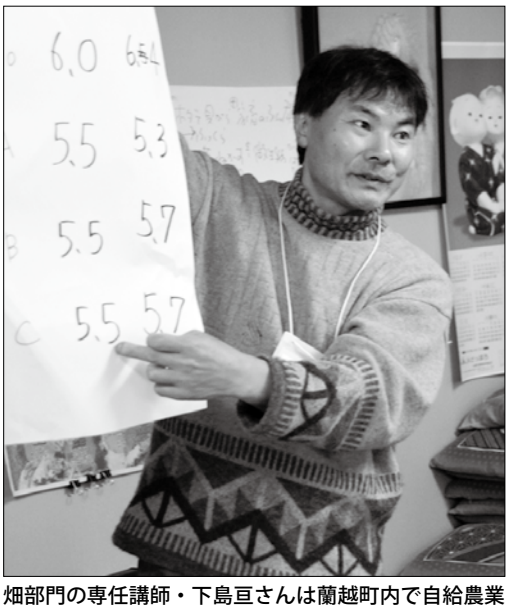
検査キットを使い採取した土壌サンプルのpHを測定(11月15日)

そして、獣医の大場さんの座学も。乳利用の文化が歴史が浅い習慣であること、第2次世界大戦敗戦がもたらした日本の食文化など、おいしいだけじゃない、奥深い話が聞けました。

やぎやの温子さんからは、これまで飼って来た家畜とその副産物について。温子さんは体力的にももうそろそろ山羊は卒業かな、とおっしゃっていて、これから始めようとワクワクするだけじゃなく、その先にあるもの、にハッとしました。

家畜を飼うことも、チーズをつくるのも、超特別なこと、と今日まで思っていましたが『あれ、できるかも』と、思い込みが吹き飛ぶ1日でした」

畑関連の専任講師は蘭越町在住の下島亘さん(1962年、宮城県生まれ)。前身の「農的くらしのレッスン」時代からアドバイザー役を担う。同町に新規参入して有機栽培に取り組んできたが、今は小面積で自給型の農業を営む。


畑部門の専任講師・下島亘さんは蘭越町内で自給農業を営んでいる

今回の講座では、土の仕組みをはじめ、堆肥の定義や原料の確保の方法、小別沢で栽培可能な野菜の種類などについて助言した。

「始まったばかりですが、農的な暮らしや自給を考えている人たちと出会えるのが楽しく、教えて反応が返ってくるとうれしい。こうしたことに目覚める人がいるのは、とてもいいことですよ」(下島さん)

と手応えを感じている。

地域の歴史に学ぶ講座で町内会役員の体験談も聴く

札幌市西区役所のホームページによると、小別沢はかつてアイヌの人たちの狩猟の場だったとされ、明治

バッコヤナギを手鋸で伐採。もう１本のエンジュは残して活用する（提供／小別沢教育ガーデン事務局）

時代の屯田兵村設置後は兵村の訓練地と位置づけられていたという。日清戦争で屯田兵が出征すると、青森や福井から炭焼きをする人たちが入ってきた。農耕に従事するようになったのは明治30年代半ばのことで、たびたび発生した山火事の焼け跡を開墾して農地に変えていった。

第７回講座で小別沢の歴史を語った町内会長の伊部義幸さん（１９３９年、小別沢生まれ）の先祖は、福井出身の農家。父母は３人の子どもを連れて盤渓地区に入植している。

地域のリーダー格だった祖父は昭和初期、トンネル掘削の嘆願書を札幌神社（現北海道神宮）に提出し、最初の小別沢トンネルが建設されるきっかけをつくった。トンネルが完成するまでは、馬で1時間ほどかけて農産物を円山地区まで運搬するなど小別沢の人たちは苦労したようだ。

小学６年生のときに父親が他界。中学卒業後の伊部少年は山奥の造材現場で働いた。地域の農業は、種子用のジャガイモやカボチャ、札幌大球（漬物用）が主流だったが、やがて葉物野菜に代わる。５年ほど前からは、市内の学校給食に小別沢産の小松菜が使われている、という。

伊部さんは現在、１８０区画を有する市民農園を営む一方、行政に対する提言も続けてきた。

「補助事業で（小石を取り出す）除礫したことで畑が使いやすくなった。それから20年以上が経過し、ハウスが導入されて所得も増えた。でも、家畜を飼わなくなり、堆肥や土を買うような百姓になってしまった」

「小別沢には農業の後継者が少なく、多くは後期高齢者。いつまで農地を維持していけるか微妙だと思う。本当は後継者がいて、地域の伝統を守れるのが一番いいのですが…。土地を生かすには、よそから新規就農してやっていくようにすることで、長続きしていくんじゃないか」

と率直な思いを語り続けた。

講演後、伊部さんに「自給の森」に対する見方を聞いてみると、

「皆さん（受講者）が関心を持ち、小別沢を評価して動いており、もっと地元の人も関心を持つようになるといい。わたしが市民農園を始めたのも、人とのつながりを創ろうとしたからです。今後は、地域の人と（受講者が）一緒になって考えていくなかで、小別沢を維持し、発展させていきたい」

という答えが返った。農的な暮らしをめざす人たちが、長くこの地で生活してきた住民と協力しあい、どんなプロジェクトを進めていけるのか――それが、これからの大きな課題なのだろう。

解体した豚肉をベーコンなどに加工体験（提供／小別沢教育ガーデン事務局）

多彩な企画で2年目の講座
生産法人の設立も選択肢に

「自給の森」の核になっている永田さんは、この企画を通して多くの人が

耕作放棄地を活用できる〝庭〟のような場所にしていきたい、と構想を膨らませる。

ひとつのモデルは、1960年ころの浦河町内にあった自宅周辺の光景。3世代住宅に面して中庭が配置され、畜舎や薪小屋があり、畑を耕す…。牛や馬、羊、豚、鶏を飼い、果樹も栽培した。父親が農家を継がず牛乳店を始めたこともあり、この形態は10年も続かなかったらしい。

「一瞬のユートピアでしたが、こうしたことを現代的にやっていくのが〝農的な暮らし〟ではないか。多くの技術や技能が必要ですが、新しいシチュエーション(状況)をどう創るのか――この講座の課題になるでしょう」(永田さん)

ドイツのクラインガルデン(農地の賃借制度を活用した市民農園)やロシアのダーチャ(都市住民向けの菜園付き別荘)などの事例も受講者に紹介し、小別沢版の新たな〝庭づくり〟をめざす。

「将来的には、農業生産法人を設立して『自給の森』が活動できる体制をつくり、社会的な責任を引き受けていくことも模索中です。麦など穀物類も手がけ、果樹栽培や動物の飼育と組み合わせて加工品を製造・販売し、食べていける場所にできないだろうか。就労トレーニングや幼稚園などの動きにつなげてもいいでしょう。法人を創り、地域の人たちと協力しながら、こうした取り組みをやっていければ…」

と今後の方向を探っている。

15年度の計画が決まり、受講者を募集済み(4月5日に終了)。今期は4月から11月まで計12回開講し、畑の作業や作物の観察、周囲の自然観察、自家採種、地域の古老の話、養蜂体験、鶏の解体、パン焼きなど多彩なプログラムが組まれている。

別日程で数回、自給の幅を広げるための工作や畜産物の加工保存、野生生物の学習などの特別講座を開く。さらに特別版として、親子のためのツリーキャビンのある庭づくり講座も開く予定だ(詳細は末尾の小別沢教育ガーデン事務局HPを参照)。

小別沢の歴史を語る町内会長の伊部義幸さん

地域のNPOと町内会、都市住民が連携してプロジェクトを進める試みに対し、市内の農業事情を熟知する札幌市経済局農政部長の三部英二さんは、こう評価する。

「小別沢は都心に近く、美しい農業景観もある魅力に富んだ地域だと思います。そこに暮らす人たちが外部からの視点を入れて地域を盛り上げる取り組みをしてもらえると、新たな農業の展開が生まれるのではないか。農業や森林について体験したり、フットパスを造るなどの可能性も高い地域であり、農を志す人たちを受け入れていくと面白い展開ができるでしょう。行政としても農地の基盤整備などを行なってきましたが、今後はこのプロジェクトが取り組む情報発信の一部を側面から応援していきたい」

座学と体験学習を組み合わせ熱心に講座を続ける

「自給の森」の試みは始まったばかりで、今後、構想の実現には紆余曲折もあるだろう。NPOと地域住民が連携し、都市住民とともに新しい「農的な暮らし」を創造していく取り組みが発展するよう期待したい。

■小別沢教育ガーデン事務局
札幌市西区小別沢33 NPO法人「あおいとり」内
TEL 011・664・5148
FAX 011・664・5323
http://garden-society.com/

※筆者のHP「滝川康治の見聞録」takikawa.essay.jp/ に本シリーズの過去記事を収録しています。ご参照ください。